里見八犬傳

第五輯　卷三

へ13
709
23

門 德 13
號 707
卷 23

明治二十八年十月九日購求

南總里見八犬傳第五輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第四十五回

名刀を賣弄しく道節怨を優し
窮寇を追失ふく助友敵を換ふ

却説樹下なる浮浪人ハ驟ぜくる氣色もなく松枝十郎真弘よりも對て某ハ下總
なる千葉の福草村の浮浪人大出太郎とのゝ父ハ夭くして世を去りし母ハ明暮て年來ハ
なりし親ひとり子ひとり貧寒家ハ孝艱菜餌の料足さへ竭くせんとすれ共ハ殘ぶ
そいこの一口の大刀ハ祖父より某まで既ハ三世の重宝なれ共身やもかえてとも
親の為ハ惜むも要なし美價を投ぜんとまつ千葉殿名ハ創藤より使者を遣せ
彼君眼豆のごとくく真玉も石も辨ぜ賢物とそ返されうかくそもか沖繼ぐ
ハ許我の御所ハ參てく親の為なる願事を叶へあげんと欲るハ人ハ紹介せられ

なる縁バ左右人に疑れて縡のよく整ハゞ再び望を失ひて又鎌倉へ赴きて山内の管領家へ售らんとおもひしに彼御内にも相識なけれバ誰とて汲引するものあれバ。當下某おもふやう世に千里の馬ありといへども。よくこれを知る伯楽なければ生涯田畝に糞ものゝ連城の壁ありといふともよくこれを識る卞和なければ瓦礫と共に碌々たり今まづ企望の三諸侯ハみな千乗の君なれども只下口の大刀を得識らバいかでか賢と不肖を擇て挙用ゆるのなるべんや大鈞なる暗君なればこの刀を售ぬもよし。扇谷なる管領家ハ賢に親しく不能を憐み寛裕と海のごとく容なばことゆゑなく篤実を地に異なりて載なばといふを聞し當今無雙の名将なりとぞ。世人ハいさくいふなり彼君ハ今上野なる白井に在城ましますが路の程いと遠くとも彼処へ参らバこの名刀の價を倍して買せたまはんとおもへて踵を旋らして足跡を募ひてこの地に来つれどもあやにく相識絶てなければ入つてよしもあらず。

砥澤に山獵したまへり市中の風聞隠れなければ帰城の折を候ひて見参に入らばやとて漫に虎威を犯しゝ不敬の罪を宥られなくこれわの事の趣を[illegible]まうしゝバおよそ犯ハおのが身びいきなりと憚る所もなく答ふる辯舌流るゝ水のごとく一癖あるべき面魂にみゆるもの哉と人々目を指して適雄々しき人骨やとて嘆賞せぬはなしなりけり定正ハ中に真弘ハそのいふ所をきゝ果て當の処へかへり来つ則縡の趣を云云と報まゐらせバ定正ふかく頷きて馬より下て道傍なる芝上に牀几を立させて。そのものを召とのたまひしかバ真弘再び走り向ひて彼浪人をいざなひ来つゝその間に定正ハ牀几に尻を懸たまへバ近臣左右に警衛して齊整としてつゝしみ[illegible]れバ件の浪人ハまづ真弘に倶せられて間近く跪けるを定正霎時とうちながめて下總千葉の浮浪人大出太郎ハ汝が祖父[illegible]明失たる母の為に家宝の大刀を售んと欲するその孝行賞すべし。その大刀何ぞの徳ありて予に售んとぞ自負しゝたる三世

家傳の由来を告よ大刀の銘を何とかふその来歴ハいかゞぞと問れて聽せば。
小膝を進めさゝ某が祖父ハ故管領家足利持氏に仕へしかのあり名ハ両公達に後ひ
まつりて嘉吉の結城合戦に陣歿して父ハ仕官を欲せず下總千葉に退
隠して年四十引こく身おりゝ年来浪人武器調度を古都七ゆひ一を買
日の名刀あり名ハ是世に名こ高村雨の大刀ハ我ら祖尊氏将軍より持氏卿に
相傳せし春王殿に譲らせ給ひ今後嘉吉の戦ひ敗れしく春王安王両公達ハ討れ
こせ給ひしゝ件の太刀ハ幸ひ家臣が家に秘置り某が父ハ彼公達の伽崖従おり
名れば結城の城を抜れ一日村雨を腰に佩く辛く屯を殺脱て千葉に僑居をとな
よし父が自筆の古記録あり紛れあるべからもいなぞとハバ定正ち領なく現村雨の
ナ刀のゆへ予も豫てより偽ぞうさるとそも名を窃む贋物をもて人を欺き
利をしも揣る為ハ許人の世に往々ある習俗なるよ汝が父の遺書をも認らぬよ迹の

傳来録を誰ら證据とするのあらんや別に證とするよ再問て些も
擬議せず御説でハ必ども贋物をもて利を謀るハ狡商人のうへよ高禄を
ぶも欲せぬ二世浪人の某さへ疑れまるハいと打ちくをも抑この大刀ハ鋭とい
陸ゝも犀象を砕るべく水中蛟龍を截とふ唐山の龍泉太阿我朝の小鳥
蒔鳩鬼丸龍尾ども笑へしも刃この右に出べからもの加藤技放てバ刀尖より水氣
流れく太山の石滴に異ならぬ振るえハ村雨の梢を洗ふに似られバ躍く
村雨と命けれを語継ぎ伝へし人口に膾炙せり鄙語に論ふ證据
ハ贋物ハ真物よく酷せと誇良に苔も果ぶ含る大刀を取直し技放ちく
見つゝ振ぶ不思議ある名刀尖より潛然として潰る水氣四方に散乱
しく彼警衛の近臣等が面を撲く降伏げば衆皆袖を拂ひあへず遥に
殿とぞ退うけるさぶ定正ハ林几を肩をもく避ら水氣のあ

精好の袴の上ゝ被りて結ぶ白露をうちて尺管底嘆の膝打鼓ぜび破落々々と落く碎る名刀の奇特ゝ疑ひ忽地解るその歓びい大ゝ形ぶ高ぜに
ゞよ等雲時大出太郎かくまぐ王ー丸證あれば疑心ハ既ゝ氷解せりその大刀これへ
やくゝくもんと思ふ太郎ハ俄然と身を起さんとする程ゝ松枝真弘推禁めくこを
不覚ゝ大出生紙中途の見参しとも貴人ゝ恐尺ゝ為ゝ帯刀せゝ為ゝ悼り
あゝ況白刃を引提く近つけるゝあゝくんや大力を見れゝ遽ゝ与ゝ免といへども
聽ゝ出頭をうち掉り原来和殿ハ某を疑ゝ疑ゝ疑ゝ疑ゝ疑ゝ疑ゝ
これも亦人々を疑ひ忽ゝ乱れる世の習俗ゝ九貴ゝも賤ゝも笑の
中ゝ刃ゝ隠ゝ貪慾邪悭ハ量りがゝ然るを今虚々と高貴人々とく心放
しく身中ゝ為ゝ下と思ひ宝を左右人達ゝ遽ゝ与ゝ価ゝ賜ゝ豪奪せられば
これハ孤獨の旅客ゝ斯夥多人々と争ふうとゝもその甲斐なく大刀ゝ為ゝ

復さぞゝ可惜命を喪ふ。
この事を定正ゝ聞ゝ当坐の遠慮ゝ慎ゝ所ゝ為ゝ亦
人々ゝ大約六十六箇國亀甲の如く封彊を建く数國を領せ所
大諸侯東ゝ為ゝ多くゝ予を良君と思ふ家宝の大刀を齎して
ぞるゝ推参せんやゝ予ハ村雨ゝ大刀の主ゝ愛ゝ時冥ゝ
高禄ゝ召使ゝ大出太郎を疑ハ要ゝ聊ゝ厭ゝ
とくみづゝあへゝ許せゝ鷹場ゝ寛仁大度の主命ゝ真弘忽地
閉口ゝ遠巡せるゝ大出太郎ハ俄然と刀を引提く身を起して
らば御免を蒙ぞ。こゝ離ぜと定正の妹九のほとりゝ衝と寄りて跪
件の大刀を進らるゝ胸前捉て仰ゝ突倒ー推伏て刀尖晃りと
さー著れば吐嗟と驚く松枝十郎竈門三宝平妻有六郎その餘の近臣外

八犬傳五輯巻四
有六郎
電門左衛門
山青堂蔵

名刀を
内ろく
道節定正
を刺す
八犬傳五輯巻四
五
山青堂蔵
英泉画
天山道節
朝谷定正
松枝十郎

様の諸士雑色奴隷列卒まもなくは癖者射る殪さん狡剥や弟と敲動も
賈誼が所云鼠を投ずる器を忌むごとくよりや癖者を討とるとも主君も倶に命を
隕さばその甲斐なしと躊躇く握る拳の汗も只沸ぎてくよ打撰ばその時ぞ
定正が刀の鞘はずしもかけつも剛敵は推伏られく終は刃を抜くとは必ず兵共拯へと
叫ぶの声はんぬべかりけを當下件の癖者は天地に鄙音けと声あり立く骨領
定正怒りけ下總千葉の浮浪人大出太郎と名告しは且く汝主後を計らんとその
假の名を去歳の四月十三日江郷田地袋の戰ひに一族後類負を盡と汝が為に
亡びぬ煉馬平左衛門尉倍盛朝臣の地黨なるめりとは知られる犬山
監物貞知入道道策が獨児は乳名道松と呼れる犬山道節忠與とぞ
君父の讐を復さんとく薪は臥し膽を嘗千辛萬苦の宿望を今を果は怨の
刃受よやと罵れば定正はよく驚怒く反復さんとする処を起しも立ば磬を左ふ

禁と引著て細頸丁と掻切ぬ松枝寵門妻有の黨敵の後類皆こをもんく
吐嗟と驚ぐ大叫喚もよ遠慮のをを下さぞ遺恨は堪ひ今さらは備を立るは
遑もあらぬ擊弟と刀尖を技列の内して八方より競ひ蒐ぶ道節は左ふ引
提し讐敵の首級を投捨くと嘯く縱横無礙は殺靡ける必死の大刀風雨狡
乎狡名刀の奇特は土を潤くる道のぬるは敵の雑兵七を獲ると撲地と砕る。
修煉の身はも瞬間は血は涙鹿の野は満く斃ぬ一人當千の
向ふは前あ紀勇士の働紀壁ぶは餓虎を群羊を駆るごく唯是一個の道節は
駭の士卒辟易てくは足場の悪かりぞ且退けと言りく發と乱てく逃迷雑兵は
誘れる松枝寵門妻有の諸士心ぞりは早れども大厦の倒れんとはるを一木は
ぞ支れを拄ん皆共侶は逸足を踏乱て逃走るを蓬一返せと呼被る道節を
刀尖より留る水氣をもち振打り一町あり追は程は一叢繁紀薮蔭より

関を咄と作して頭れ知る一個の若武者これ怎麼なる打扮ぞ但見れば素絹の皇絲
の壺盧の花を処々に縫落せる狩装束に萌葱威の身甲して精好の奴袴に
亀甲釵子肱甲臑鎧を透間もなく具足して腰に二尺五六寸なる金作の大刀に
海豹の尻鞘被く九寸五分なる短刀を横佩左に重藤の弓の握太なるを挾
て鷲羽の征箭両條を把そえたる隊の兵三十餘人おのく短鎗の刃頭を
揃へて道節が前後左右を舞々と捕繞て復武者音もなく揚こうる当下
件の若武者八弓杖突く声高やかに愚なり犬山道節良将ハものゝ時運に
稱ふ神助あり曾領いかで汝ぞと孤客に敷れもんやるの謬く汝が為に
命を隕せ假曾領ハ只是當家の勇臣なる越杉駄一郎遠安と呼れし
の去年池袋の捷軍に汝が主君倍盛の頸捕く名誉の感状を賜こる
剛者なりけれども汝が年のいまだ漫に侮りん何容々と

敷れ知ハ不思議の僥倖なんかゝるを誰とか為る曾領補佐の一老職武術
文学敷嶋の道ハも暗くそ其の名ハ都鄙に高くして巨田左衛門大夫持資
入道道寛の長男なる新六郎ぞ父の奇計を受形なく汝を謀りしとあら
ざるぬ父道寛豫くより豊嶋煉馬の残黨の隙を窺ひ潜めあらんと
遠謀なりをして去歳の秋より彼此へ士卒を遣して竊に拐り向せ
下野武蔵の間に優婆塞に安を変へて左道をして愚民を迷し銭を集め
軍陣の便点に充る汝が影迹既に顕れ幻術ありて火ハ刀に捕易ハ
油断の体なりて誰引とらんとそ曾領ハ近日より白井に在城ありと
知て鎌倉を出ぬ近臣越杉が面影のよく主君に似るを
駄一郎に大将の狩装束を賜りつきのふ五日の早旦より砥澤の山の狩倉に被走
久のむしを偽が汝を釣人為りし父の先見果して違ハず今招ぎも網に入る汝が命

運を矢弾に討捕るハいと易けれども敵かぐ可惜し死勇士と為べかるべ
箭に被ぜ及び死身の力を量りく非を悔ひ時の務を知らバ降参せよとぞ
ものゝ道節ハ謀ふかりと雖も敵に計られて怒る面に朱を注ぐ疾視
詰る必死の覚期に大力とり直して些も撓まぬ助友ごとき死耳穢の死降
参呼り九世を易るとも讐の奴とまれやかゝん今定正を討得ずとも先君の
鎗を鍋に変越杉も主の仇もひの隨に斃し留れバ聊て君尊霊を慰奪
あり恨らくハ父の讐竈門三宝平五行を斃ぐ一ぞほゝゑみ然とて
名も無き雑兵を幾百人殺さんより汝と勝負を決せん助友進めと刀を抗て
頻りに招く不敵の廣言憎くも悪しと捕るの兵ヤツと被る諸声と共に齊一種
閃く鎗を前後に飛越交踰右に受ハ左に流もの鍛煉の刀光丁々霰石と
疾風に枝を折るごとく鎗の蛭巻幾條狀砕落されて逃るあり或ハ真額乾竹割

或ハ胴創胴車矢庭に命を隕すもの十人あまりに遂るも痛を負ぬ
者忽地殿と開記肇けバ道節得うとまもく進て面もあてず助友ハ走近
つゝと程に助友騒ぐ弓に箭刺ぬく能弯周く弾と射る矢声と共に
道節ハ身を淪して避ぐ程もあらせず射出せ二の箭を大力もて丁と切
拂ふ神出鬼没の疾働に助友ハ心臓く弓を真弦哩と投捨て大力を抜んと為
程に松枝妻有の近臣ホ時分を揃て取く返し其の助友に力を勇しと被撃留
よと下知せれバ。その隊の兵数十人推隔て周く微塵に揉こうる
當下道節思ふやう思慮の足らぬく敵の謀に當られ死ぬ先君の讐
敵真の定正ホ思ぐるあらぬ加旃父の讐竈門三宝平五行もこの隊にあらぬと
海内ホ漫に進く戦殺せバ世の胡慮ホ為んのを大宿望を遂んの限りと
豎ぐんや幸ひ黄昏ぐ只一方を殺開て身を全して時を俟んあわく

死するをかぎりと尋思の臍を固めつゝ奮戟実戦初より精神ますく加りて多勢が中へ割て入る迅さ恰飃の如く只一條の血路を開きて且戦ひ且走るに敵ハ頻に焦燥て士卒を罵り奬して真弘之通共侶に何処までもと追かけつゝ浩処に信乃荘助現八小文吾ホの四犬士ハ畳裹に明の山中にて荘助が遠眼鏡もてみそかしといふ武士を見とめつゝいぶかしく思ひ偏あるとのあらんとて山を下りて彼此と尋索るにその曛昏に白井の城へ遠からぬ一村落を過る程に里の老弱罵騒ぎて今如此くの松原にて管領勢敗れしをおひて寇ハ八個の浪人に煉馬の残黨なるものぞと見れバいはく管領のいぞ撃れたる彼癖者に殺されしハ去歳の軍に名を揚たりし御内の越杉といふ人ぞとてさゝやきあへり。かくもあまた癖者ハ術㴱煉之単身なれど瞬間に死人で山を築きしといふ逃て村に走り入ぬいかにして禦ぐべき門戸をとく鎖せ女子ども喧嘩の側杖打るゝなと呼ぶ音声喧しく皆東西へ奔走れバ騒劇大かたならざれバ四犬士うち驚きて原来此までありかく復讐の本意を遂しハ彼犬山なぞあらんずらんさてその処へ赴くぞいかで虚実を知よしなからんや暮ぬ間にと共侶に歩の運びを疾めて里遠離る暁闇前面を透し長視れバ年尚わかき一個の武士が白刃をうち振て追来る敵を物ともせず敵近づけバあしく返して殺靡け撃退けて又戦ふと両三度道のゆくての四犬士の間に忽地衝と入りて背に立うとするれバ往方もあらずなりぬ。そのとき巨田助友ホハ士卒を頻に駈立て透間もなく追蒐来前粟立在む四犬士を是も道節を助太刀の同類なりと思ひけん彼撃留よと下知すれバ。多勢を頼む捕手の雑兵咄と噇て衝出る鎗の刃頭ハ夕立雨の電光よりも異ならず四犬士ハあきれもいはず驚避ても一言の向荅に眼なくれバ已ことをぬき腰刀を拔合して戦ひけり然る程に雑兵ホハ只独なる道節ぶ討撃留ざりけるに皆る

敵もまた四犬士あり譬ば山の希雄なるが一虎を追走らで百獅子に逆ふが如く忽地に
敉崩されて一町あまり退却ば助友は怒て守返して逃る士卒を罵激してみづから
短鎗を閃して四犬士を遂へば払枝真弘妻有之道、恥を知り名を惜む武士
なかにもあらざれバ入助友を相援けて刃尖より火出るまで不噓噴て攻たりける。
浩処に城中より援の兵百騎許汗馬に鞭ち宙を飛して来る近つく程をあれ
躬方を勇る鬨の声に逆る士卒も声を合して皆共倶に競ひて蒐らる新隊は
備を引まとけて横鎗をぞ入れたりける此時既に日は暮て影なき細紀六日の月も
むら立雲に隠されつ又顕ぬを明闇不定の義を篭盾に四犬士は一進一退力を勠
して苦戦に大刀の鋼鉄續がたく節のごとくなりねでも浅瘡一个所負ふのみなく千変
萬化の秘術を書しつ頻に捷に乗るものから不知案内の夜戦なり縡は素より
不意に起りてまれに援の兵来れバとも蒐隔られて逐ふに拯ふことを得ず信乃

荘助は城兵の新隊の中にまぎり圍れ又現八小文吾は助友が隊兵と戦ひ若のく暇なき四士
四所に別れても危窮はあらねど九死一生阨難なきに至るびは及べば存亡のほども知るべからず。
寡をもて衆に敵うけざる己を得ざるの継四犬士萬夫の勇あり敵に一个み
術なくとも脱れ果べくもあらざりしを有斯し程に道節は辛く大敵を殺脱て
走ること三四町既にその日は暮にたり追来る敵のなかりしかバ路傍の樹下なる石に
尻をうち掛て且く息を吻く折から忽地後方に鬨の声して撃大刀音さへ聞えけり。
道節耳を傾けて原来なほ背来つる敵に烈しく戦ひあるにぞと独間に思ひに暮ふ
敵兵を砍拂ひつゝ走りし時前面より来つる旅客等が間に入りて立紛れしを輒く敵に
遠離られんや折しも黄昏なりければ敵は四箇の旅客をまぎ助大刀のものぞと思ひて捕
籠んと競ひかゝりしかバ来し跡にいふかく戦ひあるべき彼旅客等が来つる
故にまれしは輒く追を脱れ脱れし其旅客等は敵に撃たるゝなるバ便是人を殺して

身命を保るものも勇士のせざる所なりて恥亦これなり甚しきハ辛しぞや彼処へ走りて還りて旅客ゝを拯ひて拯ひ得ざるも其人々と共侶に死なバ生るゝに勝るべし。と肚裏に思ひ決めて遽しく緩ミし帯を引締めて裳を褰げて驀直に舊の処へ還りて見れバ果して四箇の旅客ゝハ城兵に補圍れて既に戦ひ疲労てんとの危窮をはかるべく膽城中より加勢の武士百騎許ぞ来れりとかけしく勢ひ始に弥増ければ道節要時尋思をもてさすれバ敵の捨たる箭処々に多くありし又紙なる列卒縄も有なり是究竟と応手なる弓を揺り箭を挨りて索さへ漏さじ左側なる大竹籔に潜入りて敵の後に近つくを支ゆるものの絶くかゝるかく又道節ハ幾尋かある件の索を彼此の竹なかゞにかけまく引動して忽地に鬨の声を揚し久ば城兵これに驚されて云ても伏おほんる処を竹籔の中よりして射出せ強音空箭ハなく矢庭に命を隕もの五七人に及びしかバ城兵悚へ蹔く原来敵ハ

伏兵あり一圓なりぞ追ふなと罵る程に道節ハ索を引くハ竹を動し箭を射出しなハ索を引く暗さハ鳥し藪中に籠ある敵の多かるんと思ひ惑る城兵ゝハいよ\/周章くまで父道寛の軍術をぞ見馴熟たる助友も終に怺へず皆共侶に人崩撲と崩れて見れバ信乃荘助現八小文吾ゝの四犬士ハ忽地こゝに力をぬる勢ひに乗して敵をよき程に追捨てまたくも迹を瞞しつゝ荒芽山の方へ走りたり城兵ゝハ思ひうけなく。敗走りて息つぎあへず白井の城へ逃籠らんと頗る狼狽まどひしかバ助友怒て声高やかに逢かへ兵共の逃足なれ計るに敵ハ煉馬の残黨なりしや伏兵あるにあらず。怕るに足るものか藪中へハ箭を射被け鎗を突入れて駈出せて逃る奴をぞ。とく追蒐よ只一人でも撃留なバ後日の名を脱れなしといふらひぬと敦圍く烈しく下知を傳れバ城兵これに奨されて藪の邊へ於し蒐つ且箭を射被け鎗を入れ果ハ端なり撥分て衆皆揩索るに敵ハひとりも在らざりし躬方の透せし列卒

縄を彼此の竹に結びて措き原来熟く謀られうず遠くに遁げ追蒐ぬこと再び罵
駭くを時移りて往方を知らぬが呆れて進む擬勢も扨日数の不
覚に安らぐ寂寞は追ふべうず。「圓白井へ退かく便宜をもつて送るく
捕捕ふとよろめれと思ひ久しく強ての追せば竊に家隷両三人に謀を授け弟
真弘之道其侶は全隊の士卒をつそぐつて白井の城ぬぞ還りぬ。宵は
甲夜ぬぐく寂寥く人跡絶える列幹の松の背は蒼田に風渡る土堤の茅萱に
置く露を弟と聚く虫の声高くも澄る名月夜影さえ薄かに単衣の裾を脛
あらはに腰に帯る両刀の外に一刀挿添るひとも怪しかに一個の武士稲塚の蔭
よりしく四下をえうり見えうり忽然とうく立出る是はこれ別人ぬぞ犬山道節
忠與あり既に竹藪の奇計をもて駭の獻を退けく輙く四箇の旅客を拯ふれば
いよく駭れくもぬくも件の藪ぬに在らぬ近かるうに身を潜しく様く時分を揣りん

助友ホグ全隊を率く白井の城へ還りぬくを遣過し目送りそ再び顕れやる
ぬり當下大山道節は彼此に向ふく横り臥せし獻の死骸を曲々ホと見ぬう
えうく曩ホまぐ投捨る越杉駄一郎遠安ぐ首級をもちうう揚く月を燭ホ又
よくえる怨の外背凄しく霎時眺くるも領ぬ天運いまぐ全らしぬぬ管領定正
ぞとぬひく駭しいその臣遠安れども這奴も先君倍盛朝臣ホ鎗を鍋る怨獻
ぬり彼深野の恥を雪め睚眦の怨を復せば皆是志士の本意ぬホ打落しる
仇人の首級を捨て走らば大獻は怕れるうりと入ハいん些少れども今宵の家裏
うぐ先君を祭の胙これは優しきめあべしやと和とりごもて死骸の袖をうちぬく
散落離と裂とりく件の首級を推包む心のどけくとの端を帯ホ融と結附るを
後方は立くうるめのりとぬもちぐして道節は叫ぶ藪蚊を拂ふくなり去らんとする
程ホ癖者等と呼留く晃りと衝出る鎗の刀頭はあろぬうと道節は片足代ホ

あわてもと身を跳しく佶とえくり此度の敵ハ一人狩百騎よりあり城兵ごもみな逃足ハ速うしふ汝一人がくしまて虎髯を拓るハ殊勝あり名告れ汝ん人といへせ果びて鎗を繁扱く声をあり立道節さのみ廣言せられハ初度の戰ひハ早きを時ハ痍を負やられバ又功名を貪らぬ汝を捕るの駈駐ハ朋輩ハ譲るく彼処ハ樹蔭ハ退却くいぬ時を移しうかそ空しく城中へ還らんとの本意なさふ。もとり汝が往方を索ねく目今迹を認めうまぐ名ハ音ハ笑ふん去歳の四月の戰ひふ汝ぐ父道策と組で當坐ハ首を獲る竈門三宝平五行と親き人子さんまぐるひかるハ過世あるぐ犯武士の名聞首をまくもと罵うう道節ハ願ハ敵ぞと疾視詰く声高ぐふ原来汝が五行ハその名ハ豫く聞ぐ面を楚と認ぬハ擊偏せふ居残りく出く名告るハ天の賜まぐ武運を憑しくれ要時も忘れぬ父の仇其処ハ退却とと敦圉く刀を見ぐと接故せバ三宝平も亦ぐ武藝ハ誇さく些も撓ぬ逆ふ烈しく声を合しく衝出を鎗擊大刀の音も隙ハ犯生死の際一上一下と術を盡しく要時ハ挑戦へども忠孝無二の道節ぐ獅子奮迅の怒もく頻りハ進む陽の天刀を終ぬ陰ハ閃く孤く鎗を蔑哩と巻落さんく大刀を挾んとする処を大喝一声道節ぐ打ち閃を刃比下ハ三宝平ハ身を轉しく足空さぬふ倒れる軀のうへを飛越えし首を遥あぬく松ふ當りて落てくうさる程ふ道節ハ父の讐さ受ひの隨ハ擊果しくうれバ欲び比んハ物もく刀を斂めく樹下ぬ仇人の首を引提まぬ又その死骸の袖を断離く包くて腰ぬ著くうる法処ふ助友ぐ暴ぬこうらへ函置る両三人の家隷ハものく鳥銃携さく東西の樹下ぬ寛ぬく矢比を揃りて火蓋を鑽らんとする程ハ道節目をく透しくうく左右ハ掴む小石の飛礫ハ西ぬひとりハ頭を打破られく叫びもぬぐ。仰ぬふ倒れうう又東ぬ一人ハ鳥銃を

四天王寺
石台井の城
上戦の
信乃
相川
雪平
英泉画

犬山道節
月の
下ふ文の

打落されて驚瞻く取らんとするを取らもやらで道節は鵜鳥の如く疾近つきて足を抱して礫と踢る爪頭尖く吭を衝く撲打られる炙所あれば声も出で立で身足を張く仰反る程もあせば又一人弓は箭刻して樹間ようなる道節遠く逃る鳥銃取るより先く火蓋を鑽て撞と放せば郷音と共に樹下なる彼一人も倒るる三人が外は今かも敵はあらじと道節は鳥銃を伏捨て袖を拂ふく悠々と高峯の麓を辿りゆく宿を何処とおぼしきねどもあれば後あるも主を思ひ親を忘れぬ犬山は尾張のくにの上野の白井の城の城将士卒もその里人も後世まで語継ぎ伝へく道節まつとはと知い頻泣児も立地は声を殺て怕れ居る

第四十六回

三國の時張遼が武名は小児を攫しなる遼来ると聞も目覚し若し海内は揚げ

地蔵堂は荘助消級を爭ふ

山脚村は音音舊夫を拒む

再説信乃荘助現八小文吾は白井なる城兵は捕圍れて苦戦は時の移るまで有りくは死を究めは誰か圍らん竹叢の中より関を作て箭を射出して己れを助るものありれば城兵これを辟易して鐵壁よりも堅かりける重圍忽地釋るを夜に紛れ迹を埋めて同意異途は走りつ奔るくは九死を出て一生を獲こうけるを中は犬川荘助義任いぬる日庚申塚なる法場なる三犬士は死を極れ恩義を思ふ答しと思ひ知れば進むとも三士は先に防戦ひ退くと知い屢しく殊さらは後れしかば終は信乃は性方を求て又霧月に影と細い嬬竹の夜ぶよ便あれども。いい合しるものあれば何処を投く彼人は追著んとあるねを稽平が信乃は誂しとは書状の多を知ぬ

新しかるも心あるは荒芽山の方へと其処とも知ぬ間道捷径は信と走る程は今は二三十町来ぬんとするの物うるその山は麓は始著ば鄙は目はあるのうし

大敵と戦疲労ろうへよ不知案内の夜行を知るを頻て不走りふけれバとひろう
餓ろふ喉えを渇かく堪ぐ難きを此邊ハ邁ども田げども荒々ろ郊原ふ〜く
憩んと思ふ家も所〜ろれバ右側ろ茂林の中ふ火光隠々とんそしかるも
栖バ住む人ありけ。徒一碗の飯を獲ばとも敲かく水を乞ゆとて進ろ入るに
一町許件の茂林ふ多くろるふ人の家あいあるして最老ろ樹下ふ補小祠
地蔵堂あり。彼処でつくろる火の光とこの佛へまるく世ろ燈明の洩ろるあり。堂を
一間四方ふ過ぎこれ和ろく・骨を頭を萱ぶ檐ふ田文地蔵堂と題し
ろ扁額を掲ろ。このと知ぬ助ありかるかく荒ろ小堂ゆれども土地ふ由緒ある
霊佛ゆびハ里遠離る茂林の佛ふ誰ろ夜ゆく燈燭を進らびハ知田文と如ハ并作ふ
ぞ〜く利益ありふの故ろ近郷の帰依佛ゆんとあり人ハ行婦の名を呼ろ母の家ろ
ありろ〜ろ恨ばいとして立ち出去りぬ。彼此をうろうふ地蔵堂の左のろふ苔埋ろ

石塔六七ありそゆ間ふ近属建ろんを海知ぬ木塔婆もあり。を言訪ふのハ樹間ふ陰。
草葉ふ虫の声ろるのを聞く。でも閻知樹の間ふ振離贈れバ〜〜立雲ふ又ハ月の影
ゆ〜を遮け知遠寺の鐘声を〜ゆ漏さ〜と〜ふ優ふ夜ハ〜ゆ深けを初更ありそもかく
て後れ〜ふのを忘くとも甲斐やれ〜ろん且くあふ憩んとて地蔵堂の扉を開知て
雲時念して裏面の中を〜ろ〜と見入るふ石佛ゆ〜く坐像ふ身長ハ三尺許ゆある
べ〜前机ゆ一雙の花瓶ふ草の花を建ろゆ日ゆ経ふけん茎ろ〜ろ机の中央ふ
両皿の盛物ゆ〜頭を推鶴して〜ゆ〜ろ〜ふ皿ゆろハ菜と桃ゆ〜時ふ取ハ〜ゆ色も亦百
味の飲食ゆ〜ゆ〜と見ハ漫ふ声を沙敬く地蔵尊々々六道能化の教主と〜て餓鬼を
済せゆびゆ〜ゆ〜ゆ〜ろ〜も憐を見ハ〜ゆ前の供物の好ゆふ楚崑を〜ゆ肥さんゆ〜ゆ
別當ほん許さを〜と戯ろく進ろ入り引ゆ〜て菜も桃も漏を〜ゆく忽地ふ盃せ
〜ふ桃ハ三四ふ潰ろく甘液の〜ろれ〜飢を忘ろ〜ゆ〜ゆ渇ゆ〜ゆ止ふ〜ゆ方便無

量の佛恩なりと又感じて額をつゞけ退散せんとするに孤燈の油も竭き怒地に
滅入りぬの燈明いとあれかく荒れ出でぬべきてはくもの曇り雨降るとも後月の出
べくもあらぬ夜の荒野山まで遇ぐに彼人さまに遣んといまさらあひ決めさし今宵は
あらぬ時さえ欲しき彼処まぐやくべ死なんと尋思不曾ぬ安らぐ舌打まれ黄ばが口真
似歌諸者が鳴立ひしくいとぐしく虎のぬぬ小堂の框に倚りつゝと稽ぬく出るに
ぬ祈りつゝ怨地人の足音して前面より来るあり莊助なるべく透して初夜過ぎ
この茂林へ松も燈さで獨まるハ豈に参詣のあれるんこハ必盗賊の臥草造りあん
きん躙れく楚とん定めぬとぬハ身を起りて竊歩んく左邊なる石塔の
背に身を潜してその近つくを窺ひうかゝる程に大山道節忠知い君父の讐を撃
果したる両級の首を腰に著くこなくも其処を立退ぬ案内知るとなるに。
捷徑を疾走りくその夜初更の比及に田文の地藏の茂林まで来ぬり。この堂の

邊なる舊塚の間ハ今茲四月十三日君父の一周忌の追薦ぬ由縁のあり建
うし塔婆一基あるれば件の首級を嚮礼んとて茂林の中ぬ進入る浩然ぬ
後方より年老る戦夫の拵の脚絆に褄端折して竹子笠を戴ける肩ぬハ二袱の
小包を結合しうち掛く道節が跡を跟て来つ地藏堂のあるとある樹の陰ぬ
立隠れく近くもよりて戍りて道節ハ前後に窺ひめくありとなるに塔
婆の下ぬ進向ひ腰に著る両包の首級の締塊解あるして塔婆の前に賻贈く
恭しく額つけく頻に祈念を凝らしぬ莊助ハ塚の陰より透して元ども意を
肚裏に察ハこの辯者が頗して舊塚を祭るハ引剥せし贓物を邪鬼ぬ
供報して造化を願ひぬん這奴憎むべし。憎むべし。先ども驚しく試て見ぬや
と石塔の間より出し伸して並備へて二包る首級を奪ひと攫獲て引入れと
る程に道節く頭を擡く驚ぬ莊助が腕を丁と攪詰く引出さんと

前へ曳く莊助が亦引著られじとヒグ伏些も身を動さぬ応よ千尋の大木も巨根を四方ゑ張るがごとく千曳の綱ゑ被るとも為あぐくもあらざれば道節ハいよ〳〵驚死おもく怒るゑ程ゑ迭ゑ劣らぬ金剛力士の世尊の鉢を多〳〵紫雲を踏る外せ一如く間ゑ両箇の石塔を足落離揑と推倒して忽地籠目のあくなりゐれば道節獲ると衝と寄せく股杖ゑ臑を踏入るく左ゑを帯の締堰へ被入と莊助ハ臀ゑ拈て振釋く雙方入身の最ゑ抽手相撲の極秘奏法の妙奥互ゑ知くなりゐれが地を踏四ゑ力足鳥夜ゑ目標ハ暴雄の勝負孰と見る見る争ハ果一奈末與美の腕ゑ甲乙なりゐるけりこの時あぐも彼老人ハ樹蔭ゑ息を凝らしゐ。透し長視く舌を吐死その勇力ゑ呆るゐ可き端なくゐも難くゐ一を聊覚ある色のなりゐ泳るゐる面色して走り寄て両人が間へ杖を衝入れて推分んと為る気道節も莊助も再びこれゑ驚死く思ひも組るゐを放を卸含ゑ落せ一首級の色を

両人取ゐんと立ある処を取らしもやぐ又老人ハ間ゑ直と躬を入れて杖採為推開くゐ旦速の動死ゐども已ゐ肩ある両袱の裏物をうも落ゐ遠し躬を屈して頭ゑ四下を掻捞る程もゐ両雄ハ斉一焦燥立如法夜ゑ認ぬ敵心當坐のゐ寛當るゑ任して左右ゑ彼老人を突退れば跟蹌ゐ〳〵轉も倒れも両三歩退死く小勝を突るゐ下ゑ捞て當一ハ道節が難言の首級の二包ぞと思ひ付ぬゐ包ゑとあゐぬるゐく引ゐく左右ゑ抱死く身を起せとハ又ゐ〳〵道節ハ探り當ゐ老人の両箇の包をゐ難言の首級と為ゐ要時も措も諸ゑゑ引提く直躬と立て〳〵れゐとぐゐ莊助ハ且く烏夜ゑ遠し一ゐく程を揣りゐく腰ゐを見りゐ為て丁と砍る寵ハ翦くその邊ゑ推倒れる石塔の掉石の稜礪と斃ゐ刀尖鋭死巻れ冴くその石四五寸打削られて燈と出る石火の光ゑ面を認る程もゐく姿を隠せ一道節ハ火を獲く脱る火道の術ゑ往方も為ぐ〳〵ありくるを老人ハ為ゐ跡を慕ゐく舊来一路へ

走りかゝれ荘助ハ赤とのの足音を千ゞめの癖者あるべしと呼ばれけれバ些も猶豫せず續て
ゝり千ゞの岩ゝ何処ゝと投ゝこの荒芽山路へ追蒐ゝ雲りし隨ゝ霽ぬ青空の
茂林を走ゝ何処ゝと投ゝこの荒芽山路へ追蒐ゝ雲りし隨ゝ霽ぬ青空の
月ハ没ゝけんいと暗ゝ見ゝとの迹を認ゝ只ゝとり心あゝる彼山の麓村ゝ著ゝ
ける不題上野國甘樂郡荒芽山の麓村ゝ音音とゝ微賤の老女ありけゝ年の齢ハ
五十ゝあゝり二三ゝもゝり如べし原ハ武藏の人ゝゝ故ゝりゝく去歳の夏この山里ゝ世を
避ゝゝり熟ゝゝ技ゝ樗食素撲片水の薪樵る鎌倉遠妃不樂僑居かくて月日を
ゝる郷の空ゝゝ妃三芳野の田面の雁ゝゝ寒絡ゝ秋とゝ哀れゝ急ゝ冬を禦ゝ洗
衣綴刺とゝ鳴虫ゝ驚ゝゝく今宵より夜延の績苧暇ゝ現世ゝゝ苦ゝ
今ゝゝ浮世の中ゝ老の杖ゝと頼ゝゝ両箇の子共ハいゝる比主の供ゝ戦場ゝ
赴ゝゝ死ゝゝとも生ゝゝもゝ信ゝゝ家ゝ遣ゝ両箇の嫁婦のゝ兄ゝ妻を
曳ゝと名ゝ付ゝ又弟婦を單節と遣ゝ年ハ二十と十八公の松の樑ゝ常葉の竹の子ゝ

産せく又男子一人妹伏ぎ〳〵小玉匣をとゝせ近く遠離ぎども小隔あ紀相憩の優さぎ劣らぎ姑よ朝夕竭せ孝行の徳い孤ぎで鄰へいとく遠紀山脚の孤屋ぎれば人あ〳〵ぎ親族もなく友もなく任得し隨の別世界言訪ふあ八重葎檐端よ暢ふ松風と絶ぬ筧の音八ぎれど女子世帯の水入らぎ三人ぎれば姦と訓ふ文字を我ら人ぎで背門の秋蝉鳴暮しる七月六日の甲夜過く還らぬ人を俟ぎびしさ門の戸八まぎ鎖ざるる有断く音音八績果ぬ竿桶を撥遣り後ろ久りて喃単節きのふよりて管領家の戸澤山の狩倉よ斯邊の盡処まぎ夫役を指れし當月を辛く免れども勢よ售も始遣らぬ彼瘦馬のある故よけふまぎ八村長とく許さぎを小雨ぎ家小男子の絶くぎれバ可愛や曳手ゲ今朝未明より馬を追ひつゝ夫さ立く出小隨よ帰つも来ぎ途中く荷脱の馬よ逢ぎ継しとゝく飯らんといひしめぎいりぎ白井まぎ八よも徴されど趣舎ろくく丁場おぐ替馬よ始逢ぎども暮て飯らぬ夕八ある居つぬを見くより田文の茂林の邊まぎ出迎ぎ、初ぎ来ん留守しとぎといひけく分を起さんと思ふ程る單節八そく推禁て物体ぎ紀すぎ宣ふ小生ろ紀分の骨を羈くく天結陰る夜をとゝく親を使ぎく留守ぎ八ん物の今迄ぎ遅ぎ紀ぎ〳〵ぎ心小かゝり侍れど迎よ出ぎバ阿姑さぎの獨蔵く慰めくく小ん抱ひを倍人狭とくいぎで苦し紀胷よのを紫し煩ひ侍り紀胷八尚甲夜よ侍る彼茂林の邊まぎで走一走邊く迎侍ん要時の程ぎ俟せぎへと懇よ慰めく立く出ぎを引留く小ん身を牛遣らんとて壁訴をぎ八ぎ紀二人列拉久り来る顔ぎんるまぎをぎ〳〵く又抱ひを倍人のを彼玄妙寺の鐘の声今撞ん初更ぎ早く出く邁遣んより且く俟バ紀り来ん今朝も今朝とく小ん身と曳ひ侍ん俟よ立を弔ひ小ぎれ邁ん彼ぎんとく女子ぎよ相応ー馬追ふぎも老るく〳〵ぎ養ふ便著と真實し紀心操八いづれを所孰を

妹とも呼びつけれども事姉びに事ひつゝ[illegible]ん方へ送られあひ呼びその尊称なりん
[illegible]に就呼ばるゝに就く悲しび[illegible]豊嶋煉馬の[illegible]滅亡といひつゝ外面透しうんく酸
鼻する吉細雪小言可惜しくあれども受る御恩は須弥より高き吾侍が主君
陪臣でも世に知られる道策なるもいかでめすがら恥を告ぶべ情由立ぜ
らるゝ呼花の諍言と扱せるを欲ぶべ[illegible]れどいと若うしその背被へ[illegible]仕へ
しにあべ呼の欲御内の若黨焼雪世四郎と[illegible]和郎よ[illegible]ひ[illegible]と[illegible]人
視の関を幾遍欲喻くあ夜の情の塊を有身しより綽裳覚く郎と共に縛め
られ命を呂るべうしに主君の側室阿是非との其比懐姙ありいと側隠る
婦子がれば彼我が為に[illegible]寛やくそが侭日ごろ経る隨よ産ぶ[illegible]は男
児ぶく道松と命けるる吾侍も[illegible]ぶく程ぶく獄舎の中よ産帯を解しもく無
態ぶ行ぶくるべカ二郎と尺八ぶりかるし程よ阿是非とのく願ひふりて不軌の

科糾しも果ぶ免さしぶく世四郎ぬしも穏便よ身の暇をぶうつ吾侍は乳房ぶく
張れぶとそそぶ侭よ留られて和子の乳母ぶされうされば吾侍ぶ産うし孤は近邪里
人許杜鵑子よ遣らして七才の春まで字しぶ[illegible]ぶ年来道策ぶ[illegible]子育ぶう
しぶ道松和子の誕生あしぶ[illegible]歓のあまりあしを喪ぶ兒首を續れぶく母ぶ子ぶ
懇よ庇を賜ひし主の恩ぶぶう仇ぶ送るべ兒とものと兒ぶひ決めしうるぶ子ぶ[illegible]
[illegible]ぶ和子ぶ[illegible]学ひの玉とし愛ぶく夜と日とぶく字育ぶるせしぶ忘れぶ[illegible]
寛正三年春正月のとぶ兒主君の側室の三の町ぶし黒白とぶひぶ腹よいぶ来し
正月とぶる娘ぶ[illegible]ぶの母御前の悪心起ぶぶく正妻よのぶされし阿是非とのぶ
世を去りぶひぶ和子も一旦死しぶひを箇様々々のぶぶう和子ぶ不思議ぶ[illegible]
甦生せぶひぶく黒白をたぶぶ悪人ぶぶうぶく亡されぶく彼娘ぶ[illegible]ぶを大塚の
荘官許親知らぶとぶぶ約束ぶ養育を取らしぶひぶうこの時ぶも神よ禱を

佛を念して夜昼離執と貳なく仕へる五倍を特に憐しくおぼし食と道策さまその次の年の春七歳里に養ぜしこの子共を召よせ兄を十條力二郎弟を犬八郎と名つけ犬八歳十條は母の氏吾倍が親は十條佐吾と御内の煉馬家をいふ。歩輕卒けるを加以胞兄弟を道松和子の間侍ふとなく手習素讀武藝まで和子と名のりて習ひ。

かゝる主君の恩慈愛は譬を取るよ物もなかりけく去歳の春の季豊嶋殿左衛門尉信盛の歩輕卒秀に市郎四の両箇の女児を力二尺八が嫁ふと猛に縁談整ふ。妻の曳ひを力二は妻せ妹のそなさは尺八とその婚姻も同宵の時に四月十二日世に珍しき妹伏す同庚ある主の和子道松さまもいとなく妻を娶らゼしも道策さまの皆恩指揮の隨ありしその欲びは絶に一宵明るに修羅の哀き来る。

ひとけ犬俄頃の出陣池辰の敗軍に豊嶋煉馬の恩一族負を竭して斃れ犬は誰ら二人も残る犬吾倍が主君道策さまが爹々の市郎四に其処に命を隕しに犬は煉馬の館さへ火攻せられて家中の男女大小を灰燼とのりて失せ時存命ふべくもあらぬ身の為人なりしかれば両箇の嫁婦を左右よりて辛く重圍を脱て些の由縁をあらわてふこの山里に落住りしは全く命を惜むにあらず。和子と子共の存亡を探ぜく後世とともかくもかくもと豫く覚期を究めし故。

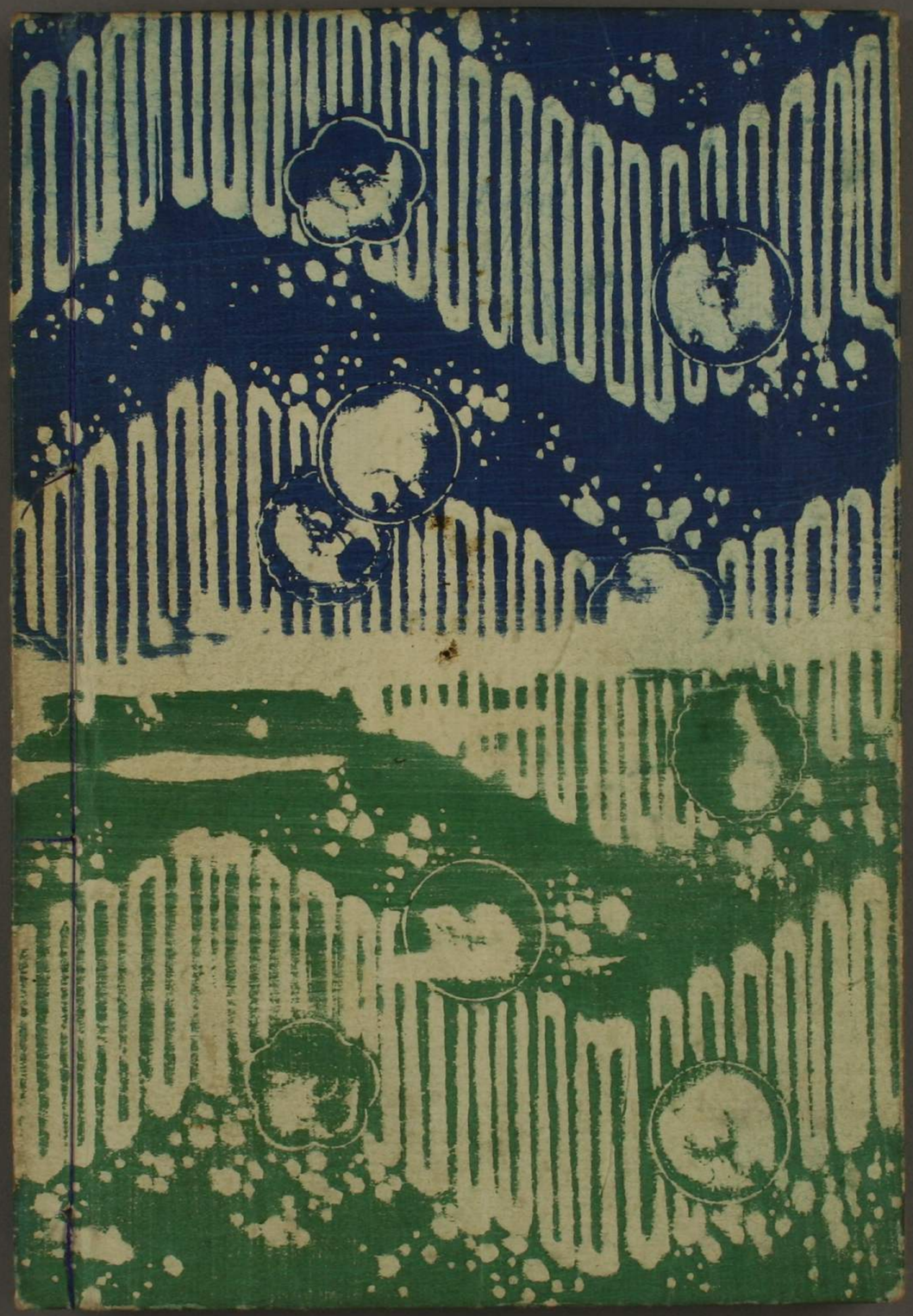
その甲斐ありて和子は信望えあるを音耗犬は俱に戦殺せしやあん妹伏の契りは絶に一宵一日も添ぬ良人の面影尚視覚る遑ぞ犬人とをりんは変ぬ操の妹ぞ山婦の故は熟くまで吾倍は優し犬孝親節義をもつて就くいろひ犬は舊夫世四郎ぬし大山の家を去りしより神宮河原に不樂つも猪平と名を改やく網引を業に只ひとり細い煙を立槙の潮のまゆく今も為恙ぞと戸田松の風の便りにやすらぐ十年は餘る去歳まで絶く歸参の願ひを立てば況や主家の滅亡をぞ良しん阿容々々と仇人の氏よりも果し心は鬼狭人に

して人とも思ひ給へねど縁は絶ても両箇の子共が親てふ文字は削られぬ断ども断まぬ血脈を引ば胞兄弟倶に父に似く命惜しからぬ刃を伏せ敵に降参せるとあれば信義に背くよりまさるものなしとは思へども片心なかるゝ竊に和子に問まゐらせもせんに知ぬ事なれば何事もまづ告ぬ子とのゝ絶てあくは親のあるゝはいかぞうに長閑ゝくんをかぞへぬれゝ拙を長生る愚痴は老女の癖ぞを噫益もなき長物語は夜延の隙を費しくり耳苦しくもあれどもとのゝ鼻をうちかゝば單節も涙さし吐くとあふ有さるに物語は皆教訓の端なるに「言ありとも苟且ようけのゝくり物ゝんや婚姻の事の仮ゝさりに良人はとても世に在りとも思ひ決め弦び二世の契りを憑むの胞兄弟倶に仇人に降参あるべきにも有まじきなれば胸苦敷は世四郎殿尊くぶに阿翁ともいれ奴隷の柵に掛ぶ歎妃を外にのゝ過しゆは故をあるゝ妹伏の縁しは絶ぬとも両箇の子逢は母御前共倶に二十年あまり犬山の家に仕へくもはせしに帰参の願ひの出ぬとぞ聞しは故を伝りけゝ浮世の中に親とて子を思はぬはなしと執成せば頭をうち振りそゝ思ひ給へる浮世の中に親とて子を思はぬはなしと執成せば頭をうち振りそゝ思ひ給へる当国も亦角谷家の米地でへ伝れども神宮の郷は豊嶋の舊領仲一百姓はとまれかくまれ彼人に阿容々々と仇人の民に成れんや命を賦ぬはを推せば故主の恩も子共のゝ思ひ出る忘れかんと腹立げに減を扨ゝ外面に立入響を音音はまゝ突つけて彼は曳ゆが還しり形ん疾燈燭をとゝ間に單節は躍く柄指燭して先に立つ折戸の裡面に。妖ものかゝせもひし欲どもやかゝ遅かりしとのひうけて振照らを指燭に面を對さればそれ史あゝぐんも老ぬ老さる一個の行客し袱包を肩に竹子笠を引提つ戸口に立て小腰を折め某にこの山脚ある由縁を尋るあるん途中で賊に追れしゝ息煩れて堪ぐこし水一瓢賜れゝと乞れて忽地奥覚の窓つゝとうち視戍るを音音はいまゞあゝぐして曳ゆよさを疲労けめとくゝ動を牽入れ足を濯ぎて休ひゆとの慰めく立出ぬ単節が乗る指燭の光に思ひもも

亦行客と面を對て鉈ずや錯ひふけると不樂しげふ迭ふ再びをんからうんくる行客
もあく呼みくとをこい音音ふあぐるを。これハ世四郎の褶平ゆり見忘れくる欲いうおぞやと
名告るふ扨とうあ騷ぐ胷合ろく死諸折戸を裏面ゆり礙と引蔵こう軍郎ハ牛の老へが
名告るを聞くこの人ゆりとこひあらぬ胸苦しいふをぶ伏退く姑の袂と竊ふ接駐て
ゆ〜風彩客ゆがを強顔くいあく適ーも甘彼ハ〜く良人の爰々欲面影忘ーあ〜ぞへ
ゆ〜心ふ人ぞとも今宵ハあふ歌あるーせく武藏のゆの今昔を語慰めあ〜ぞとい世も
果ぶ声苛やふをハ何ゆをいるをゆん心弱ゆを女子とのをとも浮世の義理ゆ背かんん
善あ〜ぞもえ更ゆ廿年あゆり縁絶ゆる舊夫ハ両筒の子共が親ゆと親あ〜ぞ分ゆを故
ゆく名告も會ハゆり此不軌ゆ異ゆんゆ世四郎とのハ縁断ゆうゆ又褶平とのふ翁ふ詐を
覚絶ゆく〜ゆ壁ゆ認ら風彩客ゆりとも故主の鴻恩忘ゆとあく忠義ゆ厚き誠あゆ
今宵ハ疎ゆゆく〜ぞも留ゆるゆのあゆ泉ふ廿年あゆ一日も帰参の勸解をゆゆ〜しも

仇人の民と為るまでの義理は肩を比べ人と知りて何樂くく武藏のもれ今昔を思ひ
相譚なべ妃尽ち捨く措孤り情を被ひと敦圍卓妃光女の一輙をも理ともい
ー単節ハいる宵苦しさ背向かりく嘆息を精平これを浅ましく音貫恨
さぞあんされ豈夫婦の情義をもて阿客々とてお人身を訪ん忘れく妃を設
きの恩一日も仇おろひども浮世の塵を避ーあり漁夫とあり果てた又一小の功も亦何面
目ま帰参の勧解して子共の身の幅を陝くもべ妃これを素ありのまま志るあく
潟心めと兄ハ令郎君のうへ且又子共のまま編ま報ひとおひく武藏の盡妃
うもあくと取かやうあく詰来さり且くあを閑てまと敲く折戸の内ま音音ハ
子共のうへも編ま報ひといるま再び胃ハ驚げどるひ又て同者もびるま泣く嬶を
久りて扨も単節が涙脆さよ今の世の人心親同胞でも油断ま身の仇ま例もあり外ま人ハ
歌かさも間諜者ぞあんぞんさく庁鎖心そうひて門の戸外ま閉ま妃

咳妃く履音暴く縁頬ある障子を磯と鬲隔く母屋へ退妃入りぶり単節ハそをさを目
送りさ。
送りさも氣剛き姑の心の底を汲ま妃ねもいと為て妃良人の安否を問おほ
うをを兄ま家へ遠ーく指燭を弗と振滅して編ま折戸を引閉て猎平を遠ーを痛ーを
暗夜ま何時ま立せるへき阿姑御前の礼ま言ハ年来大人のおんを思食る誠心ハ
腹ちくまのおせるひとこの山辺ま客店ま且く彼処の柴置小屋ま途の疲労を休ひく
妃ま候へく母屋へ伴ひまんへ人を単節とられる嬶を偽りと名告あくを
涙を袖ま押拭ハ猎平ふく慨びて原来を妃さハ豫て先く尺八が妻単節ありー欲
ひ年来の志と情由を音音が為るまれハ罵らるとも辱ま妃ー廿年あまり胡越の
絶く今妃故主へ竭し忠義とのうんハ嗚呼あんとも編ま令郎君ま見参ーを稟試をとハ
一議ありさぞまま又子共ぐへを母ま嬶ま告んとそ為るとま茶ーを空ーく還ハ本意
ま妃臥房へ何処あれ一宿暁さーまひねとまま単節ハ又ま泣く世とを時と

物体の良人の多き宿貸あんぢ甲斐なきふぐ言の葉を縁ふ繋る識をとかー
こゝも諾ぬ心苦しさ限りなれど彼処ふ要時潜せ更大くふ土間なれ玉簪子も
些ハ侍ふ物欲しふ蚊遣の団扇進くその行果の重げふ姿ふに
ふふ預けぬ人とふ隔ふ愛々しさふ猪平ふもく心ふるく田文の茂林ふ二箇の
包を採違ーしふ思ふもうけぬ。
先ふ立く柴小屋へ案内をしぬ休ふけぬ。二更の鐘の音ふる当下音音ハ障きを
ふきて単節ハ何処ぞ寝ふの鐘の報ふ曳ふハ聞くふと聞れて単節ハ
柴小屋より両三束の續松をとり添く走り出ふふ苦ふ多ふ月来熟なる
路をふ遠く見ふ回答く母屋へ徳と入りて猪平ふ両箇の包をぬ仕戸棚へ
隠ふ草鞋穿締め裙壷ぬ移ふ松の火をぬり照しふ外面へ頻ふ走りふる。

里見八犬傳第五輯巻之三 終